
彼女の思いと海岸の町

相葉ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の思いと海岸の町

【Nコード】

N4571S

【作者名】

相葉ユウ

【あらすじ】

サードインパクト後の世界。静かな海岸の町から始まる物語

第1話 私は水川カオリ

「は~~~~、今日も青い海にきれいな夕焼け、か」

水平線が一望できる砂浜である女性が浜辺に座り込み独り言を呟いていた

その女性は髪が腰まで伸びていて、顔も美人という部類に入るものであった

綺麗な夕日と浜辺、そして美しい女性が一人浜辺に座っている、まるで一枚に絵画のような風景

時が止まっているように見える光景がしばらく続いていたが、夕日の光が少しずつ弱くなりだすと

女性は立ち上がり、砂を払うと浜辺を後にした。

浜辺から自宅までは海沿いの道をしばらく歩いたところにあり、別に浜辺でなくても家からでもこの光景は見たが

なぜか、私にとってはあの浜辺から見る夕日が好きだった。自分にはなにもないと思っていたときにあれを見ると

なにかあるんじゃないか。そう思える。

そうやって、今日も見終わって歩きながら帰っていると前から10歳ぐらいの子供が自転車に乗って近づいてきた

その子供は私に話しかけてきた

「あれ、カオリお姉ちゃん、今日も浜辺に居たの？」

子供は髪の毛に塩に匂いがついちゃうよと注意するように言うと、私は少し苦笑いしながら答えた

「でもね、綺麗な夕日を見るとね。元気になれるよ」

子供はそうだけども、とやっぱりとおねえちゃんの綺麗な銀色の髪がと私の髪を気にしていた別に自分の髪が綺麗だなんて思ったことは一度もない。これは罪の色なのだから。

自分が犯したさまざまな罪の罰なのだと

「早く帰らないと、お母さんとお父さんが心配するよ。ほら」

なかなか動かない子供に私はそういうと、その子は自転車をこいで自分に家に帰っていった

もう少しで太陽は沈み、このあたりは暗くなるだろう。

そうすれば、このあたりは一面暗くなる。2年前に起こったサイドインパクト、それによってこのあたりは悲惨な光景になった。

それが復興によってようやく海岸の町を取り戻したが、まだまだ完全ではない。街灯は少なく、夜になれば真っ暗だ

そのため夜に出歩く人は少ないし、出歩いたら懐中電灯が必要だ。私は完全に暗くなる前に自宅に着いた。

自宅は私を拾ってくれた両親が旅館をやっている、離れの部屋を使わせてもらっている。

「ただいま」

「あら、おかえりなさい。また夕日を見に行っていたのね」

困った子ねと母は苦笑いしながらも、早くお風呂に入って塩分を流

してきなさいと言った

本当の母親ではないが、私はこの女性が好きだ。見ず知らずの自分を引き取り、わたしを育ててくれる母親を。

私は母親の愛情を受けながらも、人を拒絶した自分がそんなことを思うのはいけないという思いがまだ時たま頭をよぎる

そのときに偽りの器で居る自分が無性にイラつく事がある。自分はいくらでも生きていくことができるのだと

「自分の罪の証、そして……」

私はこの髪を洗いながらそんな事を口走っていた。でも偽りではない。本当のこと。髪と瞳の色は罪の色。

瞳は彼らと同じ赤色。まるでトガビトであることを示すかのように。あのときに犯した罪、私にとって悪魔のような時間、

私以外にとって、あれ以降、喜びに満ち溢れた人も居たのであろう。でも私にとっては一生かかっても返せない罪を背負った

私はそんな事を考えながら、洗い終わるとお風呂につかうとした。その時、お風呂と更衣場をつなぐ扉が開かれ母が入ってきた

「あら、カオリ、まだいたんだ。今日はお客さんももう上がって今はお休みよ」

「いつもならもっと遅いのに今日は早いね」

「ええ、きょう皆さんお疲れみたいだったから。お早めにお休みなったわ」

だから、私たちも早くあがれたのよと母は嬉しそうに言った。仕事が終わることは嬉しい事だとわかるが

ま、接客業だしいろいろ大変なんだろうねと思った。私自身がこ

の旅館を手伝うという事はない

引き取ってもらってから、いつもこの町をぶらぶらしているか、あの砂浜で私は夕日をただ眺めている

最初は母も心配になって後をついて来ていたらしい。散歩コースがわかると母はあきらめたように懐中電灯を持たずようになった

もつとも、それが母なりのやさしさであるという事はわかっているが

「ねえ、カオリ、今度、第3新東京市の高校生がこの旅館を使う事になったの」

「・・・そう」

母が話しくそうにそう話を切り出す私に私は愛想なく返事をしてしまった。

あの事件以降、私は他人に興味を持つことは少なくなった。それが私の恐怖の現われなのかどうかは分からないが

「もし、あれだったら、断っても」

「母さん、私にそんなに気をかけなくても良いよ。私はもう大丈夫。何があっても逃げないって決めたから」

私はお風呂からあがると、母に言った

「私は、碇シンジじゃない、私は水川カオリなんだから」

私はそういって、お風呂を後にし、更衣場で着替えると離れにある自分の部屋に戻っていった

第1話 私は水川カオリ（後書き）

以前に自分のホームページで掲載していたのを再連載
以前とは一部話が違いますが、加筆修正の結果なので

第2話 今日も変わらぬ日々

部屋に戻った私はいつものように日記をつける。日記といっても、別に書く事はない。

今日は夕日が綺麗だったや、今日は誰と会ったなど、普通のものだしそれ以外書く事はない

自分がこの部屋に入ってからかったものはあまりない。服やちょっとした小物だけ。

このあたりで生活するにはそれぐらいで十分であった。

自分にとって本当に必要なものは何か考えるが分からない。自分というものが理解できていないのではどうにもならない

「今日も変わらぬ日々。そして何も無い日々か」

私はそう漏らした。何もない日々、確かにいつものように夕日や町を見ることが私の日課であり1日の大半をそれで過ごす

この家で一日を過ごす事は少ない。さらにいえばこの家で居るのはこの辺りが暗くなった夜とお昼のご飯のときである

それでも、私を暖かく向かい入れてくれる母や父が好きだ。この家もこの町も、そしてこの世界も

「カオリ、少し良いか？」

廊下から父の声が聞こえてきた。私が扉を開けると父は深刻そうな表情をして立っていた

「お父さん、どうかしたの？」

私がそう聞くと父は言いにくそうに言った

「実はな。第3新東京市の高校生が林間学校でこの旅館を使うんだが、別館も一部使う事になりそうなんだ」

父がなぜ言いにくそうにしていたのかようやく分かった。その言葉で私がとても大事にされているのかがよくわかった

彼は私が彼らと接触したくないのではないかと思っただけで言いように部屋割りを考えたのであろう

でも、それが無理であり、わざわざ私にそれを確認しに来たのだ

「いいよ。お父さんはそんなに気にしなくてもいいよ。私は父さんの娘だよ。なにがあっても」

私がそう言うと父はそうかと少しうれしそうにしながら部屋を出て行った。

この数時間で私は父と母に本当に大事にされていると確認できたそのことを日記に書き足しておいたのは言うまでもない。私にとつて、それは最高の日になった

翌日、私の部屋に朝日が差し込んできた

私は基本的には規則正しい生活を送っているので朝起きるのは早い。今日も7時ごろに起きるといつものように着替えて

部屋の中を少し片付ける。まあ、基本的にこの部屋にいることは少ないからほとんど片付いているが。

本や服が片付いていないので今日は朝から片付ける事になった

「それにしても、今日もきれいな太陽さん。散歩はできそうだね」

私はそんな事を言いながら部屋を片付けると、朝食を食べるために食堂に向かった

この旅館は特に損傷や壊れている所もなく、廊下の脇に花壇が置かれている。

それが朝日にあたってとてもきれいに見える

そんな何気ない事にも私はまだこの世界にいるんだと思う。

「あら、カオリちゃん、おはよう、もう食堂でご飯をお客さんも食べてるから言ったほうが良いわよ」

別館から本館につくと旅館に勤めている女性が布団を運びながら私そう言った

ここで勤めている人はたいてい住み込みの人が多い。また、そういう人は別館に自分の部屋を持っていて彼女は私の隣の人だ

私がここに来たときからいろいろとお世話をしてもらっている人の一人である

「ありがとうございます。今から食堂に行きますから」

女性は今日もお散歩日和と言うと布団を持って外の布団を干す場所に慌てて進みだした。今日はお客が多いようだ。

少ないならあんなに慌てていくはないが、人手が足りないから一人で何回かしなければならぬだろう

「おはようございます」

私が食堂に着くと厨房の人に挨拶をすると、中からおじさんが私用の全体的に量の少ない料理を出してきた
おじさんは今日もしっかり食べないと途中で倒れるぞと言うと奥に戻っていった。あれ以降、私は食事というものが嫌いになった
あの赤い世界、何もない地獄、それを長い間見ていた所為で何も食べれない体にならなくなってしまったのである。
あんなものを見れば誰でもそんな事になる

ましてや、心を壊され、何も考える事ができなくなった私に食事なんてする余裕はなかった。
ただ、赤い世界を見て一日を過ごす。そんな無意味な事をして過ごしてきた。なにもない。

あの赤き穢れのない世界に私は何も見出す事はできず、最終的には私は1年を過ごしたらしい。
正確な日付は私にも分からない。それを記録しているものもない。

私が1年と判断した理由は太陽の上がった回数を思い出せば、365回上がったと覚えている。

普通の人間なら覚える事はできないであろう
私は人ではなく、神の力を持つ『ヒト』。世界を創造しうる力をもちながらも、それをせず何もしない日々を過ごした

ある時、私はようやく自分に気づき、そして、世界を『創造』した。

「世界は我と共に、そして我は世界を・・・」

そして、世界を創った。元の世界を再びを創り出した。
その際にサードインパクト、セカンドインパクトによって死亡したはずの人がよみがえるということを起こってしまった。

さらに私は自分の性別が男性から女性に代わり、見た目も身長などが少し成長して16歳前後に変わった。

自分にとっては幸運だった。死者の戸籍を作成するために、政府は簡単な審査で戸籍作成を行っていた、

制度をうまく利用して新しい自分を作り出した。ネルフが存続した場合、自分はその調査対象から外れやすい立場における

セカンドインパクト時に亡くなった人を今から調べるすべもなく、私は申請の時にあることを記入し戸籍を作成した

『セカンドインパクトと呼ばれる大災害を知らない』と

それによって私は新しい戸籍が得られ、最初は『神名カオリ』と。

その後、このあたりをぶらぶらしているときに今の両親に引き取られ、養子縁組をし『水川カオリ』となった。

「あら、カオリちゃん、しっかり食べないと、道端で倒れちゃうよ」

また別のこの旅館で勤めている女性からそういわれてしまった。

みんな私のことを心配してくれる。本当に私のことを子供のよう thinking 思ってくれる。

今、この場所に入れることが私にとって何おり幸せだと感じる。私は大丈夫ですよと返事をすると。

食べ終わった食器を調理場に持って行った

「今日もおいしかったよ。いつもありがとございます」

そう私がお礼を言うとおじさんは少し顔を赤く染めて「そうか」とぶっきら棒にいった。

私はそのまま厨房にある通用口から外に出るといつもの散歩コースを歩き出した。

父と母は私の本当の名前も知っている。碇シンジであることも、ネルフのパイロットであった事も。

そして失われた英雄である事も、2人は私は私たちの娘だといってくれた。だれが何を言おうと私は水川カオリだと。

その言葉をはじめて聞いたとき、私は本当の家族の愛とはどういうものなのか、何か少し分かったように思った。

今まで私は母や父の愛など受けた事もないし、そんなものを知らなかったのに、本当に嬉しかった

娘だと、私は自分の娘だ取ってくれた二人は私は守ろう。そう決めた。

第3話 お姉ちゃんの髪は太陽だね

朝の海岸の町はきれいだ。山から太陽が少しずつ上がるのがわかり、近くの小学校や中学校に向かっていている生徒も多く見れる。私はそんな光景を見ながら海岸線に沿った道を歩いている。海は太陽の光をきれいに反射し、まるで大きな鏡があるようだ。

「おっはよう！カオリお姉ちゃん！」

昨日夕方に出会った子供が私に元気よく挨拶をしてきた。私もおはようと挨拶をすると子供は私の髪を見て言った

「お姉ちゃんの髪は太陽だね」

私は言われたときはその言葉の意味が分からなかったが、子供が説明してくれた。

「お姉ちゃんの髪はね、太陽さんの色と同じなんだよ。朝はきれいな白色、夕方はオレンジ色、僕はどっちも大好き！」

子供は元気よく私にそういうと嬉しそうな表情をして腰近くまである髪を触った。私は少し嫌そうな表情をしてしまった

すると、その子は、僕、何か悪い事言ったという感じで聞いてきた。私は別にそんなつもりはなかったが子供は敏感なようだ。

私にとってこの銀色の髪は嫌いだ。多くの罪を犯したがためにこんな髪になってしまった。

それを綺麗と言われても嬉しくなかった。この子が落ち込まないよ

うに私は簡単な言い訳をした

「少しこの髪にいやな思い出があつてね。それを少し思い出しただけなんだ。ごめんね。誤解をさせて」

私がそう言うと、その子はそうなんだと言い、でも、お姉ちゃんの髪はきれいだし僕は大好き！その子はそう言うと、

遅刻するからと他の友達と少し早く歩きながら学校の方向に向かった。

この海岸の町は家の軒数はそれほど多くない。町としては小規模で田舎だがのどかな光景は好きだ。

都会はみんな忙しそうに動くが、このあたりは誰もがゆっくりと過ごしている。

感じる事ができない時間がここでは大きく感じられる。

お昼ごろには八百屋や漁業で生計を立てている人がゆっくりとした午後のひとときを過ごしている。

そんな光景がみれる場所だ。この町に林間という形で来る中学生や高校生は多い。

近くには第2東京市・第3新東京市があることから、その地域の学校の生徒がくることは珍しくない。

ただ、第3新東京市にある学校関係の生徒は基本的に外部に出る事がないのであろうか、ここに来た事は一度もない。

それが、今回はじめてくることになった。私はそんな事で両親を心配させたくなかった。

「たしか、今日の昼過ぎには来るんだよね」

私ははつきり言えば会いたくなかった。両親が見せてくれた名簿に

は良く知った名があったからだ。
でもその時は私は嬉しいと感じてしまった。

『渚カオル』 『惣流アスカラングレー』 『碇レイ』

この名前を見たとき、私は本当にそう思ってしまった。
でも、しばらくして自分の事を思うと会いたくないという感情が大
きくなり、もうそんな事は思わなくなった。
今の私には関係ないもの。『水川カオリ』なのだから、

私はため息をつきながらいつもの散歩コースである町の外れにある
海を見渡せる展望台にたどり着いた。

そこに設置されているベンチに座った。この展望台は崖ギリギリの
所に設置されている。

そのため、飛び降りようと思えばできるし、下は複雑な海流をして
いるため落ちればまず遺体は上がらない自殺の名所だ

そんな場所だが眺めは良い。大海原が一望できるこの場所は写真家
やその手が好きな人物が良く訪れる。

今日はまだ誰も来ていないがおそらく昼過ぎからは訪れるであろう。
この場所の、この町のすばらしさのあまりこの場所に家を作り住ん
でいる一人の男性がいるのだから

彼と会う事は良くある。夕日が綺麗な海岸、そしてこの展望台など
で。

よくモデルになってくれないかといわれたが私は断った。そんな事
ができるほどのヒトは良くないと。

最初をあきらめずに何度か来ていたが、今ではいつか良い返事を期
待しているよと声をかけるぐらいだ。

今日は風が強く、私の髪が時々風に流される。
それもまたこの場所の魅力なのかもしれない。自然が生き物のよう
に感じられるこの場所の

人はあの悪魔のような出来事によって、自然という本来お互いに共
生しなければならぬものを見失った。

それを感じることが出来る場所はもはや少なくなっている今、そん
な場所が残っている場所は数えるくらいしかないだろう。

これからさらに開発が進めばさらに減るであろう。人は傲慢だ

世界を創造し、少し余裕が出てきた今だからこそ分かる世界の感情。
世界はまだ悲鳴を上げている。

私はそれを感じることはできるが、それを伝える事はできない。

神がすべてを教えてはならない。人は自立しなければならぬ。誰
かの意思に従ってはいけないのだ

「今日も早いね。それにしてもいつみても綺麗な光景だね。カオリ
ちゃん」

私が深い深い考え事していると声をかけられた。

大海原に向けられていた視線を陸地側に向けるとそこにはカメラを
持った、20代ぐらいの男性が立っていた

この人物こそが私がさっき話したこの場所をこよなく愛する男性で
ある

「ええ」

私が愛想なく返事をする、彼は私を見て珍しいねといった。私に

はいったい何が珍しいのかが分からなかった。

「いつもは明るい表情で言葉を返すのに今日はものすごく深刻そうな表情で言葉を返してきた来たからだよ」

彼はベンチにカメラの機材を置き、私の横に座った。

「心配な事でもあるの？」

私は別にとまたぶつきらぼうに答えてしまった。不機嫌なときの自分はどうしてもそういう答え方しか出来ない。

もともとあの1年間、『ヒト』とのコミュニケーションなど誰もいないのできるはずもないし、

もともとの性格もあって、人とのコミュニケーションはさらにやりにくくなった。そんな私でも彼はいつも話しかけてくれる

「いろいろと、悩む事もあって」

私はもう行くねと言うと、その展望台を後にした

もう時間はもう少しでお昼過ぎ。

展望台からあの砂浜までの道は前半は横ががけつぷちの道、後半は砂浜が横に広がる道である

太陽さんももう少しで真上に来る時間だけあって、道路のアスファルトから熱が湧き出てくるように感じる。

今日は特にそう感じるのはいっぱいあれの所為なのだろうか

町の中心部まで後半分というところまで歩いたとき、後ろから大型バスが走ってきた。

一応この道は1車線分しかなく途中で行き違いができるように一部
広い部分もあるが
砂浜が見えるところまでいかないと1車線が続く。そんなところを
大型車が通ればいやでも目に付く。
私がバスに乗っている人を見るとそこには私の良く知る人物達がいた
そして、その人物達は私を見て驚きの表情をしていたように見えた
が、何せ一瞬しか見れなかったので詳しい事はわからない。

「別に家で会うんだし。いいか」

私はそう言つと再び歩き出した。この暑く、家まで続いている道を

第4話 本当にこの歌が好きね

私ที่บ้านに着くと、もう中は生徒でこった返していた。大きな荷物を持った生徒が先生から説明や諸注意を受けていたが皆、これからのことに気持ちが高ぶっているのかあまり聞いてはいなかった。

「あら、カオリ、おかえり」

お母さんが私を旅館のロビーで見つけて声をかけてきた。

私は今日は暑いし早く帰ってきたのと言うと、お母さんはそうねと温かい笑顔で私の言葉を返した

ロビーにあるイスに座りのんびりとここに設置されているテレビを見ている。

部屋に帰っても特にすることのない私はこうやって過ごすこともよくあることだった

別に私のことを知っているのは旅館で働いている人と両親しかいない。さらにあのとときの仲間とは年が違うのだから。

私はもう戸籍上18歳、身長も普通の女性より少し高めなので特に年齢が低く見られることはない

戸籍を登録した際に私の年齢が分からなかったので、年齢を高くして登録したのだ。

だから安心して過ごせるはずなのだが、今はものすごく不安である。

「あの、少しいいですか」

私が少しずつ悪いほうへ考えが進み始める直前に声をかけられて声

が発せられた方向を向くと、そこにはあの3人の仲間がいた。

何とか平常心を最大限に使って冷静になると、かまいませんよと了承の言葉を出した

大丈夫、気づかれないと、必死に自分を落ち着かせようとするが、でもそんなに簡単にはいかない

「はじめまして、渚カオルと言います」

「私は碇レイです」

「私は惣流アスカラングレーです」

3人はそれぞれ自己紹介をするが私はあまり聞いていない。もうなにがなんだかわからなくなりそうであった。

どうして私に話しかけてきたのか。どうして自分の事を見るのか、もう何も考える事ができなくなりそうだった

「カオリ、どうかしたの？」

私の様子に気づいたのかお母さんが声をかけてきてくれた。

私がお母さんのほうを見ると、少し慌てた様子で私に近づき3人に言った

「ごめんなさい。この子、少し熱射病にでもかかったみたいだから、部屋で休ませるわ」

ごめんなさいねと謝ると、カウンターでいろいろと仕事をしていたお父さん呼んだ。

私をおぶって部屋まで連れて行くように頼んでいた。

お父さんは私の顔色を見て、お母さんに簡単な昼食をもってきても

らうように頼んでいた。

私はとても申し訳ないと思っていた。3人に会っただけでこんな気分になるなんて夢にも思わなかった。

吐き気、頭痛、眩暈、まるでたちの悪い風邪にかかったような気分になった

そう考えている間に私はお父さんのおぶられて別館にある私の部屋に連れて行かれた。

お父さんが布団を引いて私を寝かせてくれた

「カオリ、無理はするな。まだ1年しか経っていないんだ」

お父さんは私に毛布をかけながらいうと、私はありがとと返すので精一杯だった。本当に気分が悪い。

それに気づいたのか、お父さんは私をおこし、背中をさすってくれた。たったそれだけが少しは楽になった。

「あなた、カオリは」

お母さんが簡単な昼食を持って部屋に来た。本当に心配してくれたようだった。

お父さんが大丈夫だというとお母さんは安心した表情になったが、私がまだ顔色が悪かったのか、

「やっぱり心配だね。近くのお医者様に」

そう言ってくれたが、私はそこまでしなくても大丈夫だよと返した。ただ彼らに会ってあ那时的記憶を思い出してしまったのだから。あの悲惨な赤い世界にいたときの記憶。幾度となく忘れようと思っただが忘れる事ができなかった記憶

その記憶を夢で見ようものならばらくは寝付けない。怖くて仕方

がないのだ。またあのときに戻るんじゃないかと。

「なら、しばらく私がついているわ」

お母さんがそういつてくれたが私は大丈夫だよと言い、断った。二人にそんなに迷惑はかけたくなかった。

これは自分の犯した罪の償いのようなものだ。

それに両親を巻き込みたくなかった。だが、お母さんは譲らなかつた。

「だめよ。あなたは私の娘なんだから、それにあの子達はこれから海に泳ぎに行くそうよ。仕事は少し時間が空くから」

どう言っても動きそうにもないお母さんに私はそれじゃお願いと言つと、はいとやさしく微笑みながら言つた

お父さんは、お母さんにそれじゃカオリを頼むぞと言つと仕事に戻つていった。

部屋を出て行く直前に、体調管理はしつかりとなと言い戻つていったお母さんは不器用な人ねと言つと、私はお父さんらしいよと返した彼女は私の頭をひざに置くと子守唄を歌つてくれた。

それは私がああ夢を見て寝ることができなくなった時によく歌つてくれた歌

私はこの歌が大好きだし、本当にこの歌を聴くと眠ることができ安心できる。

お母さんの温もりが近くで感じるからだろう。家族の温もり。

私にとって、一生で会うことはないと思つていたものだったがこの場所で初めてであった。

あの戦場のような場所であった第3新東京市ではそんな愛情はもらえなかつた。ただ、使徒を倒すために生きていた。

今になって考えてみればそんな感じだったのかもしれない。だが今は自分の時間をゆつくりと過ごしている
そんな事を考えているうちに眠気に襲われた。後は何もわからない

「あらあら、本当にこの歌が好きね」

この子がいつも眠れないときに歌ってあげる歌。私も小さいころはこのうたで眠ったことがある

そして今、私は人類を、世界を救ってくれたこの子に、親の愛情など知らぬ力オリに私は精一杯の愛情を注いだ。

この子には幸せになる権利がある。いや、どんな人間にもその権利はあるはずなのに。

この子は一番つらい事を経験し、幸せなるどころか、大きな悲しみを背負った

私たちにいろいろと話してくれたが、おそらく私たちが想像できないほどの苦しみや悲しみを経験したのであろう。

あの子がこの話をするときはものすごく悲しい目をしている。

もし、神様がいるなら、この子にどうか幸せを、世界を救ったこの子に。

私たちの娘にどうか幸せを与えてあげてほしい。たった少しの幸せでもいいから。

でもそんなものはない。この子が一番分かっている。この世界には神様などいないということ。

そしてこの子の話を聞いた私たちも。それでも願いたいというのは私の身勝手なのか。

できれば、あの子たちにはもう会わせたくない。もうこの子が苦しむ顔は見たくない。

たとえ、自分が生んだ子でなくても、今この子は私の、いや私たち

の大切な娘なのだから

第5話 明日はいい事あるかな

「う・・・ん」

今何時なんだろうか。自分は太陽の夕日が部屋に差し込んできたので目が覚めた

この部屋はほぼ真南に海が一望できる窓があり、そこからも夕日が良く見えるが、砂浜からの夕日のほうが美しく見える

私は完全に目が覚めると机の上においてあるお母さんのメッセージを見つけた。

そこには、目が覚めて夕日が綺麗だったら私が散歩に行くであろう事を予想してかかれたものであった

お母さんは抜け目なく、部屋にはきちんと懐中電灯が置いてあり、遅くならないように帰ってくるようにと書いてあった

自分の行動がもう完全に予想されている事に苦笑いをしながら、私はお母さんへのメッセージを別の紙に書いた。

それを机の上に置くとその懐中電灯を手にもち、部屋を後にした別館の廊下を歩いていると何人かの生徒に会い、私のことを見て驚いた顔をする人などがいた。

しかし、一切気にせず旅館をでると、また海沿いの道を歩いていった。

海岸まで家からだいたい10分ほど、それほど遠くない。

道にはきちんと歩道が整備されていて車線は2つあるが、この時間はほとんど車の通行はないし、

誰かに会うとすれば海に遊びに行っていた生徒や自宅に帰る小学生くらいだ。私は誰も気にせず、ただ砂浜に歩いていく。ちょうど良い時間なのか砂浜が一面太陽の光の色に染まり、そこは一枚の絵画を見ているようだった。

だれもいない、ただ時が止まった世界。

私たちすべての生物の母の海、それらが綺麗に太陽色に染まった世界、私にはその一瞬を見ることが楽しみだった。

道路から砂浜に降りると、写真家の男性がこの風景を写真におさめていた。

何か足りないのだろうか、また撮り直していた。

私には何となくだがわかったように感じた。彼が撮っている写真に足りないものが。

でもそれが何かを言葉で表現する事はできなかった。

言葉では表現する事はできないこの風景の魅力、綺麗や美しいなどでは到底語ることができない風景がそこにはあるのだ。

私たちを魅了し、それを放そうとしないものが

砂浜に座り込むと、ただその光景を見るだけ。太陽が少しずつ沈んでいく光景を

少しずつ太陽の光は薄くなり一面が真っ暗になっていく。闇のカーテンが下りてくるがこの一瞬もまた好きだ。

太陽がもう少しで沈むか沈まない一瞬が。

太陽が完全に沈む一面真っ暗になると、私は手に持っていた懐中電灯をつけた。これでようやく少し先の視界を確保できる

砂浜の近くを走る道路には電灯はあるがその光はこちらにはあまり届かないのでどうしても暗くなる。

私は懐中電灯の光をさつき男性がカメラで写真を撮っていた男性のほうへ向けると

男性も懐中電灯をつけて私のほうに歩いてきた

「こんばんは、カオリちゃん。早く帰らないとお母さんが心配するよ」

途中まで車で送っていかうかといわれたが私は歩いて帰ると言った。たった10分の距離を車で送ってもらうのは気が引けたし彼の自宅と私の自宅は正反対の位置にある
わざわざ遠回りをして帰ることはないだろうと思って断った

「それじゃ、またね」

私はそう言つと砂浜から道路に上がるとまた来た道を戻り始めた。そこはさつきまでとは別世界だった。一面真っ黒の世界。砂浜付近は電灯があるが自宅と砂浜の間には電灯は少なく暗い。一寸先は闇といった感じだ。私はそんな道を懐中電灯の光をたよりに帰った。

自宅に帰ればおそらくまた彼らと会うことになるだろうが無視しようと思った。

もう彼らのことなんてどうでも良い。私は今自分がここに居れるだけでいいのだから

本館から入るとそこには受け付けカウンターにお父さんしかいなかった。

おそらく他の人は今日来た生徒のご飯やいろいろと準備をしているのであろう。

私はお父さんにただいまと言うと、彼は今日は綺麗だったかとぶつきら棒に聞いた。

とっても綺麗だったよというと、お父さんはそうかと返事をした。あとで夕飯を持って言っただけから部屋で休んでいると言い、受付カウンターの奥にある事務所に入っていた

お父さんの彼らに会わそうとしない心遣いに感謝しながら別館にある私の部屋に戻っていった

本館の廊下では誰にも会わず、別館でも同じだった。みんな大広間にでもいるのであろう。

この旅館に宴会をするための大広間と普段職員や静かにご飯が食べたい人のための食堂がある。

食堂からは海が一望でき、その光景も絶景だ。

そのため、風景を楽しみながら食べたいグループは食堂、騒ぎたいグループは大広間と大体決まっている

部屋に戻るとすぐにお父さんが夕飯を持ってきてくれていた。

食べ終わったら部屋の扉の前において置いておけと言うと仕事に戻っていった。

私は持つてきてくれた夕飯を食べると日記を書き始めた

「今日はいやなことが多いな」

私は日記を書きながらそんな事を思っていた。彼らとの再会是最悪だった。それにお父さんとお母さんにも迷惑をかけた。

「明日はいい事あるかな」

そう言うと私は布団に入り眠った。良い明日を願って

第6話 私がこの世界の敵になったら

翌日、今日も朝から天気は良好で私の部屋に廊下から朝日が差し込んできた。

私は昨日と同じように起きると、近くにある上着を着て部屋を出た。今日は少し霧が出ていて白い煙が漂っているように見える。さらにそこに太陽の光が当たり幻想的に見えた。

別館を出ると別館と本館の間にある庭に出た。

別館と本館は一応屋根のある通路でつながっていて、その通路の両脇はきれいな花が植えられた庭があった

庭にでると花壇にある猫じゃらしと遊んでいるネコを見つけた。ネコに近づくと逃げると思ったが、逆に私に擦り寄ってきた。

ちなみにこのネコはお母さんが可愛がっているネコで庭の中にはまだ数匹いるだろうが、今私が見る限りこの1匹しかない

私はそのネコを抱っこすると、この子に言った

「一緒に朝ごはんを食べにいこうっか」

するとこのネコは私の言葉が分かったのか、にゃーと鳴き声で返事を返してきた。

私は他のお客さんに迷惑がないように本館を通らないで事務室の裏口に行くと、

その部屋にある棚の置いてあるキャットフードを一つとって缶きりでそれを開けた。

小皿にそれを盛り付けてネコの前に出してあげた。ネコは嬉しそうにそれを食べていた。

私はそれを事務所にあるイスに座りながらのんびりと見て、過ごしていた。

「じついう朝も、いいね」

ちょっとした朝の出来事。それは私にとって綺麗なものだった。

「カオリ、今日の朝食をもってきたよ」

私がネコばかり見ていたのでここに誰は入ってきた事に全然気づかなかった。

驚いて声のするほうに振り返ると、お母さんがお盆にここの朝食の定番メニューであるご飯に味噌汁に卵焼きがあった。

どうしてお母さんに、私がここにいるのが分かったのと聞くとここに入るのを見かけたからよと言われた。

お母さんはそれを机の上に置くと、私の額を触って熱はないわねと真剣な表情で言った

私はあまりのお母さんの心配ように少し苦笑いをしながら大丈夫だよと返した。

一方、一人食事をしているネコさんにつられたのか他のネコさんもここに集まってきた。

私はネコさんたちがえさの取り合いをしないように自分のご飯を食べる前に他のネコさんの分の朝食を用意するとお母さんが

「まるでお母さんね」

そう温かく微笑みながら言った。ネコたちは仲良くえさを食べていた。

彼らはみんな仲良し。けんかをして、時には仲が悪くなる事もあるが、最後はみんな仲直り。

それは小さな子供達と同じ。最後は結局仲直り。私にも彼らとそう

ありたいがもはや叶わぬこと
すでに人ではない私にそんな事はもはや叶わないし、すでに彼らと
は年齢が違う。

お母さんとお父さんとこの場所が平和であり続けるならば今の私に
とって他の事はどうでも良い。今この場所だけ

「ねえ、お母さん」

「なに」

「もし私がこの世界の敵になったら、お母さんはどうする」

私がそんな突拍子もない質問をするとお母さんは驚きの表情を浮か
べるが、質問に答える前に私を後ろから抱きしめた

お母さんは何も答えなかったが今の態度でどんな答えだったのか分
かった。

きっと、私がどんなに世界の敵になっても、私のことを娘だと思っ
てくれるという答えを

「それじゃ、私はこれで仕事に戻るけど、カオリ、ちゃんと体調管
理しないとだめよ」

お母さんの出て行く前の何気ない一言でも今の自分には最高の言葉
に感じる

私はネコさんたちが食べた後の食器を事務所に設置されている簡易
キッチンで洗って食器乾燥器に入れた。

今度は自分の食べた後の食器を持って事務所の裏口から出ると、厨
房の裏口の置いて食器をおじさんに返した。

今日もいつものようにおいしかったよと言うとおじさんはまたぶっ
きら棒にそうかと返事をした。

さらに体調には気をつけると私に言葉をかけてくれた。私はお辞儀をして裏口から出て行った。

私は砂浜には行かないで一日旅館で過ごそうと思った。たまにはそういう日もいいだろうと言う思いもあったが、彼らに会いたくなかったという理由もあった。

部屋に帰っても特にすることがない自分は久々に部屋の荷物整理でもしようと思いつき立ち、部屋に出ている小物を整理しだした。ちなみに、私の部屋は部屋がふたつあって、旅館の部屋なので（一応）玄関から直線状に部屋は作られている。玄関から入ってすぐの部屋は少し小さいが奥の部屋はその部屋より広い部屋になっている。

さらにいえば、奥の部屋にあるベランダのような場所からは海が一望できる。

もちろん、ベランダは西向きにあるので、太陽日没時はきれいな光景が見れる。

お客さんはたいてい本館だけなのでこの別館の良さは知らない。別館の2階と1階の私の部屋は職員専用の部屋となっている。

今日は元気いっぱい的高校生が別館の大広間などにいるのでいつもよりうるさい。

私はうるさい彼らに悪態をつきながら部屋の片づけを続けると、本の束一冊のアルバムを見つけた。

これは私がここに来たときに買ったものでここでの思い出の写真や写真家の男性がああ展望台や砂浜で撮り、私にくれた写真が収められている。

私はその写真の一枚一枚をゆっくりと見ていた。私が笑っているときに撮られた写真はあまりない。

基本的に呼ばれて振り返ったときに撮られた写真が多い別に笑えないとかそういうことではないが、なぜか笑う気がないのだ。

だから、ここに勤めているみんなで写真をとったものも私は表情は硬い。

あるページで多くの人が集団で写っている写真があった。これを撮ったころはまだ私がここに来て間もない頃だった。

お母さんが記念撮影をしましよつと言い出したのが発端だ。

最初はお父さんは嫌がったがお母さんの勢いに負けてしぶしぶ写真に写っている。

私は写真のちょうど真ん中に写っていて、後ろから私と仲が良い仲居さんが抱き着いている

お母さんとお父さんは私の両脇に居て、あとはばらばらだが、それぞれピースをしたり自分なりに写っている

その写真以来、この旅館を利用した人に、旅館のどこかで記念撮影をしてもらうというサービスが誕生した。

もちろん、このサービスを考えたのがお母さんであったのことは言うまでもない

部屋の片づけを中断してそのアルバムに魅入られたように見た。

しばらくアルバムをめくっていると、夕日に包まれて私が砂浜に座っている時の写真があった。

これはあの写真家の男性が私にはじめてあったときに撮ったものだ。彼曰く、ここには世界の美しさが写っているという事だが、私は別にそんな事は思わなかった。

その隣の写真には、仲の良い仲居さんである林ユリさんと私、それと猫の親子が写っている

これはお母さんが飼っているというか旅館に住んでいる猫が子供を出産したのを記念してお母さんが撮った写真、
ちなみにお母さんと私と猫の親子が写っている写真もある。一つ一つに思い出がたくさん詰まったアルバム
それをきれいに本棚に片付けると室内に設置されている小さな冷蔵庫にあるコーヒーをとり、海を見ながら飲んだ。

そのコーヒーはいつもは少し苦いと思うコーヒーの味が今日はさらに苦いように感じられた。

第7話 自分はもう『知らないのだ』

部屋の片づけがあらかた終わる頃にはもう夕日が落ちそうになっていた。

私は片付けに熱中していたので時間の経過に気づいていなかった。で、今日はこれくらいにして終えることにした。

別に急がなくてもこの部屋の荷物が急に増える事はない。焦らなくても時間はたくさんあった。

私は夏といつてもここは海沿いで夜は寒いので上着を着て夕飯を食堂で食べるために部屋を出た。

本館をゆっくりと歩きながらいろいろと思い出していた。ここにはじめて来た時の事を、

ここにはじめて来たときは、私はおびえた子ウサギのように仲居さんともあまり話さず無口な女の子だった。

ただ、一人の仲居さんが私に積極的に話してきた。彼女の名前は林ユリ。私がつとも仲の良い仲居さんだ。

最初は無視していたがそれでも話しかけてきた。私は一度どうしてそんなに私に話しかけると聞いた。

すると、彼女は私はあなたと友達になりたいだけと。

どうしてそうなりたいたのかと聞くと彼女は分からないけどただ友達になりたいだけだと返すだけだった。

少しずつ、彼女と話すようになり私は心を開いていった。信用しても大丈夫だと思ったから。

この人たちは優しくかった。自分があれだけ無視し続けたのに私が話しかけるときちんと言葉を返してくれる。

それに元気になったねとおまけ付で。今では、楽しく会話ができるまでになり、暇なときにはよくおしゃべりをしている。

そんな過去のことを思い出しながら歩くと、すぐにロビーに着いたように感じた。

ロビーには誰も居らず皆彼らの相手に忙しいのであろう。

私は一人食堂に向かおうとしたとき、ロビーのソファでゆっくりと眠っている少女を見つけた。

彼女はもう少しで食事の時間が終わるである事を知らないのであるうし、友達も呼びに来る気配はない。

私はため息をつく、女の子に近づいた。いくら、この季節が夏だとしてもこのロビーには冷房がかかっている。

こんなところで寝ていれば風邪を引くのは目に見えている。幸せそうに眠っている彼女を起こすのは起こすのも少々気が引けたが、肩を軽く揺さぶっておこした。

彼女はまだ眠いのか少し眠たそうな目で私を見た。

どうやら、まだ自分がどうなっているのか理解していないようだったので私は彼女に晩御飯を食べそこねたようだねと言った。

するとようやく、今自分のいる状況と今の時間を大体予想しショックを受けたような顔をした。

どうやら、今日は彼女にとって嬉しい晩御飯だったみたいだ。

私は食堂で少し食べる？と聞くと彼女は頷き、彼女と食堂に向かった。

食堂にはいつものおじさんがようやく一段落したのかイスに座り新聞を読んでいた。

他の厨房の人も同じく自分達のご飯を食べている人もいればゆっくりとテレビを見ている人もいた

私が食堂に顔を出したのに気づくとおじさんは今日は上の連中とメニューは一緒だぞと言い、カウンターを指差した。

そこにはすでに料理が出されていた。私はその料理の量を見てある意味ショックを受けた。

いつもの1.5倍はある。これを全部食べさせるつもりだったのかと思うと今この少女がいたことにもものすごく感謝をしている。

あんな量、小食の私が食べれる量じゃないことは彼だって十分わかってはずだ。

どうせ、多く作りすぎたからとりあえずまとめて入れたといったところであろうか。

とりあえず、私は女の子と席に着くとおじさんがそいつはどうしたんだと聞いてきた。

まあ、今頃上でわいわいしているはずの生徒が私と一緒にいたらここに勤めている人から見たら驚くべきことなのであろう。

他人に興味を示さないという事で通っている私が何にも知らない女の子と一緒にいるのだから。

私は、居眠りしてて食べ損ねただけよと事実をそのまま言うと女の子は顔を真っ赤に染めた

恥ずかしいのは当たり前だが、事実を言ったほうが早い。おじさんはそいつはまた珍しいなと言い新聞を再び読み始めた。

私は女の子と一緒に豪華な夕飯を食べ始めた。もちろん、このあたりのことについて聞いてくる女の子の質問を聞きながら。

いつもとは違う楽しい会話をしながらの夕飯になった

食べている途中で空の上にはきれいな月が丸く出ていた。私はそれをみて、普通の人では絶対に言わない呼び方をするときがある

『赤い月』

私がいた頃は月は赤かった。月のすべてが赤かったということはなかったが、赤い色のある月。だから『赤い月』
月の光がこの食堂にも入ってきていて、穏やかな海には月が映っている。

それは美しく神秘的な光景だろう。人を魅了する月。ルナティック月が人を狂わす、西洋では月が人間を狂気に引き込むと言われた。そう言われている月も穏やかなものだ。

そんな事をぼんやりと思いながら食事を済ませると、彼女を旅館の部屋まで送ることにした。

もう彼女がいなくなったことには気づいているだろうし、事情を説明したほうがいいだろう。

「送っていくよ。みんな、心配しているだろうし」

私がそう言うと彼女は恥ずかしそうにありがとうございますと云った。

彼女と共に本館の廊下を歩いているとおそらく先生であろう女性が彼女の姿を見て駆け寄ってきた。

どこに行っていたの、みんな心配してるわよと少し叱るように話した。私は女性に、1人でロビーで寝ていて晩御飯を食べ損ねたので私と一緒に食べていたんですと事情を話した。

彼女はそうなんですかと納得してくれた。女性にあとをお願いしますというとその場を離れようとしたとき女の子が言った

「あの、あなたのお名前は」

そういえば、言っていないかった事に気づき言った

「水川、水川カオリ、ちなみに18歳だから」

自分のことを名乗ると本館を後によつと別館への連絡通路の方向に歩き出した。

いつもと違って少しうるさい通路、高校生達が騒いでいたのだろう。先生が説教をしている声が聞こえた。

こんなに平和な世界もあるときには想像もつかなかった。

そして、連絡通路にもう少しというところで後ろから声をかけられた。

「水川さん、すこしお話をしませんか？」

この言葉、いや、この声の主は私が大嫌い人のものだ。私はすぐに分かった。

無視をしても良いがここで下手に疑われたくはない。了承の言葉を出すと本館と別館の間にある庭のほうに歩き出した。

別にどこでも良いが誰もいないとはつきりと分かる場所で話したかった。

どうせ、彼が聞きたいことは大体想像できた。なぜ、自分がこんな容姿をしているのか、もしかしたら・・・

私たちがその場所に着くと彼は話を切り出し始めた

「あなたは、どうしてそんな容姿をしているんですか？」

「そんな事を知らないわ。私がこんな容姿になったかなんて、海で救出されたときにはもうこんな容姿だったそうよ」

別にそう答えれば誰もが疑う事はなかったが、これがいろいろと知っている彼ならば話は別だ。

彼は知っているのだから、この容姿の本当の意味を

「そうですね」

「それだけなら、私はもう戻るから」

そう言うと私はその場から立ち去ろうとしたが彼は私に言った。碇シンジという名に何か心当たりはありませんかと。私は振り返り、そんなに名前に聞き覚えはないわと答え私はその場を後にした

自分は今もう『知らないのだ』

彼がいたことも、かつて使徒が存在していた事も。

自分は今もうあの街の人間ではないのだから

第8話 あなたは覚めていないからわからない

朝目を覚ますと、廊下から生徒達の声が良く聞こえてきた。

まだゆっくりしたいとか、しばらくここにいたいとか意見はさまざまだがここが気に入ったようだ。

もっとも、学生は勉強が忙しいのでそれから逃れたいという気持ちもあるのだろうけど。

私にとってはようやくうるさい生徒達といやなお客が帰ってくれるのだから言う事は特にない。

一応見送りをするため、布団から出ると外用の服を着て簡単に髪を整えると外に出た。

廊下には多くの生徒が歩いていて。荷物をたくさん持ち思い出話に花を咲かしている生徒も居る。

それにしても、今日も良いお天気、ここ最近雨が降っていないので水不足にならなきゃ良いけどと

ちよつと馬鹿なことを考えながら、連絡通路を渡り本館のロビーに着いた。

そこでは先生が生徒を並ばせ、遅れていない生徒が居ないか確認していた。

私はロビーのソファに座るとテレビのニュースを見ていた。

たまに彼らの様子を見ていたが、これから大都会に帰る事をだるいと思っっている生徒が多いようだ。

「カオリちゃん、ようやく静かに寝れるわね」

見送りのために居た仲居のユリさんがうんざりした様子で言った。どうやら、彼らがうるさくてあまり眠れなかったようだ。私は苦笑いをしながらも今日からはゆっくり眠れますよといった。今日で団体客はしばらく予約はないので平和な日々が戻ってくる。ようやく平和な日々が戻ってくるのだから嬉しい。

さらに私の場合、あの会うのも嫌な人と離れることができる。私にとってはそのほうが大きい。

旅館の支配人でもあるお父さんに感謝の言葉とお礼を生徒達が儀礼的に述べると旅館から出て行き始めた。

旅館の傍を走っている道路にはバスが止まっていてそれに乗り始めた仲居さんたちは見送りのため生徒達と共にバスの傍まで行き、手を振っている。

私も彼らと同じような行動をしたが後ろのほうにいた。

少しずつバスが走り出し、バスが見えなくなるまで見送ると仲居さんたちにお母さんが言った

「さあ、片づけをしましょう。それが終わったら今日はもうお休みよ」

今日は予約客が入っていないため、これでお仕事は終わり。

ただ後片付けが今回のお客は大変だろうというのは大体予想していたことだが。

実際に部屋の後片付けだけで一日をつぶす事になるとはこのとき誰も予想はしていなかった。

私も布団干しを手伝っていたが、忘れ物がかなりあったので後で宅急便で届けないとお母さんが言っていた。

布団干しも楽ではなくかなりの枚数があったので干せる場所を探す

のが大変なほどであった。

いつもは草花とネコ達の楽園も今日は布団がいっぱいあり、大人のねこたちは草花と戯れるのではなく、今日は海から吹く風で揺れる布団に背伸びして、布団を掴もうとがんばっていた。

草花達も布団のせいで今日は満足に太陽が当たることはないだろうが、子猫さんたちと戯れていた。

ねこじゃらしはやんちゃな子猫の相手に忙しそうだ。

子猫はなんとかして猫じゃらしを掴まえようとするが、風でゆらゆらと揺れるのを掴まえるのは難しいようだ。

あと何年かして大きくなればねこじゃらしに届くようになるだろうがこんな和やかな雰囲気もあ有的时候には体験できなかったものだろう。私には使徒とエヴァと自分のことで精一杯だった。それ以外何も考えることはできなかった

それが今では、子猫と戯れたり他人の事も考えられるくらい余裕ができた。

ただ、今でもあの時、あの場所での惨劇は忘れることは永久にないだろう。

通路の一面にこびりついた血と死体の山。

おびただしい数の人の亡骸に自分は恐怖に陥り暴走、拳銃の果てにサードインパクトをおこすという史上最大の犯罪者。

誰も真実を知る者は居ないだろう。なぜ死人が蘇ったのか。なぜサードインパクトが起こったのに、人は滅びなかったのか

そして、最近の気象観測で地軸が戻りつつあることがわかったそう
だ。

セカンドインパクトによって地軸が大幅にずれ、日本は1年中夏真っ盛りになったが、来年か再来年にも季節が訪れるそうだ。

人々にとっては祝福すべき出来事。セカンドインパクトによって地

軸が大幅にずれた。

日本は1年中夏であったがずれが解消することによって、作物などさまざまな面で大きな影響があるだろう。

そして、動物達にとっても再び住みやすい事になるだろう。

セカンドインパクトによる急激な気象変動によって多くの生物が死滅したが、

最近になって絶滅動物達が戻っているを確認したと。そういう明るいニュースが多い今年はきっと良いことがあるのだろう。

ただ、ひとつだけ、心配事がある

「それにしても、お天気続きで本当に水不足になるかも。タンクの掃除、やったほうがいいかな」

ここ最近天気が良い日が続きっぱなし。雨があまりというかほとんど降っていないかった。

「それは大丈夫でしょ。明日から天気は悪くなるってさ」

「そう、なら安全ね。早く出てきたらどうですか。ルミナさん」

建物の陰に隠れる場所から一人の女性が出てきた。髪は背中の中ほどまで伸ばし自分と同じように髪が白銀色で紫の瞳をしている。私と同時期に発見されたらしい。ちなみに近所にある小さな家で一人暮らしをしている。

なぜか彼女を自分は知っている気がする。どこかで彼女といたような気が。でもどこで会ったかは思い出せなかった。彼女に聞いても彼女の答えはいつも同じ

『私はあなたを知っている。あなたは私を知っている。でもあなたは覚めていないからわからない』

そう答えるだけだ

その意味は分からない。でも彼女は言うように私は知っているのかもしれないが思い出していないのである

実際、あのときの事もすべてを覚えているわけではない。一部記憶が飛んでいるところもあるのも事実だ

赤い世界に失われた命、そのとき誰かが私の傍にいたように暖かかった。でもそれが誰だったのか。

そして本当にそこに誰かいたのかすら分からない
事実を知る者は私しかないのだから誰も知らないのだ。

第9話 偽りの世界の中に居るのだから

太陽はそろそろ夕暮れ時、これでようやく平和な日々が訪れる事になるだろう。

今日は予約客が居ないので仲居さんや板前さんたちと楽しくパーティーなのだが、自分は参加はしないことにした。

夜から写真家の男性と少しデート、というか近くの町まで送ってもらって買い物をすることにした。

いつもなら他にも誰か一緒に行くのだが、みんな楽しく盛り上がりながら自分に自分だけで行く事にした。

もつとも、2人で行くのがこれが最初というわけではないので慣れている

行きは写真家の男性が運転をして、帰りは私が運転をする。私も普通免許を取得済みなので問題はない。

ちなみに行き先は第3東京市。そこで必要な日用雑貨等をまとめて買ってくるので結構な量になるし、金額にもなる。

そのため、私が今回大金をあずかることになった。はっきり言って気分は最悪である。

あの街に行くのは嫌いだが、この町から一番近いのは第3新東京市であることは事実だ

「そろそろ、第3に行ってくるね」

ロビーで一応受け付け業務をしている父に言うと、封筒を渡してくれた。

中身はお金と買ってくるもののリストである。ちょっと今日は厚みが大きいような気がするが、今は気にしないでおこつ。

封筒を受け取ると私は旅館の外に出た。空には重そうな雲が漂っていた。

どうやら、昼間にあつた彼女の言うとおり雨が降るようだ

道路にはすでに写真家の彼の車が止まっていてこちらに手を振ってくれていた。

「今行きます」

私はそう言うと彼の車に駆け寄り、ドアを開けて助手席に乗込んだ。4WDの車で4人乗りだが、乗り心地は、あえて言わないでおこう車はゆつくりと走り出したが振動が……。慣れればそうでもないが慣れていない人にはちょっときつい。

おまけに今日は雨だ。暗い中車1台で走るのは肝試しとさして変わらないうららう。

海沿いの外灯もない道を走り、しばらくすると風景は一転する。今度は山道になる。

いくつもの峠がありそれを通過するため4WDのほうがいいのだ。

また一部整備が遅れていて舗装されていないところもあり、この雨でその場所はぬかるんでいるだろう。ちょうど良かった。

「眠っていても良いよ。帰り、つらいよ」

男性が運転をしながら私を気にかけてくれた。

つらいのは分かっているが、こんな振動がきつければそう簡単には寝れないのも事実だ

外は真つ暗。それでもドラマのワンシーンでよくあるような駆け落ちした二人のように見えないこともない。

ただ、今この車にはそんな甘い雰囲気はないが。

愛の逃避行なら最も明るいうちにしたいたいものだ。こんな暗ければ甘い空気にもなれない。

私はため息をつきイスを少し倒すと眠ろうとした。この車に何度か乗っているし寝つきはいいほうなので大丈夫だろう

人は忘れる事ができる便利の良い生き物。記憶を消す事はできなくても忘れる事はできる。

私には世界中のすべてがインチキに見えるときがある。

ネルフの偽装、政府の偽装、そして世界の偽装。すべてが偽りだらけの世界に真実はあるのか。

マスコミですら偽りの事実には翻弄されそして世界の人々も偽りの事実には翻弄されているのだ。

本当の意味での偽装のない情報など、この世界には存在しないのかもしれない。

もしそうならこの世界は偽装された情報に翻弄されている

わたしもその一人なのかもしれない。

だって、偽りの世界の中に居るのだから

第10話 帰りは少し荒れるかな

心の安息。そんなものが来るのはいつの事なのか。いまだ先が見えないこの世界に私は彷徨っている。

闇が続く世界に私の安息は程遠い。いつ襲ってくるかもしれない過去を恐れ、今だ出口の見えぬ闇。

やがてトンネルを抜けることができるだろうという光。

その交錯する世界で私は一度、区切りをつけた。忘れるという行為で。

だがそれは完全ではない。そんなものは所詮仮初めの平和に過ぎないのだ。

忘れるという行為はあくまでも時限付の安息でしかない。

いつかは取り戻すかもしれない。その記憶を。そんなものは信用にならない。

もし本当に忘れたいならそれは人として最後の手段をとるか、自分に嘘をつき続けるのどちらかを選ばなければならない。

どちらも茨の道だろう。だが、私にそんな覚悟はなかった。あくまでも一時的な安息を選んでしまった私を。

今では何と愚かだったのかという思いがある。

記憶に翻弄され、闇に覆われた世界で生きるのはごめんだ。生きるなら明るい世界で生きたい。

いつかその願いが叶う日が来るだろう。私が明るく本当に安息を手に入れられる日が

そんなことを考えながら私は眠りについた。

「・・・きて、起きてよ」

体を揺さぶられて眠っていた私は目が覚めた。どうやら、第二東京市に着いたようだ。

外を見ると山ではなく、無数のビルが車の周りを覆っていた。車はどうやら第3新東京市の中心部に来ているようだ。

「運転、代わる？」

私は疲れているであろう彼にそう言葉をかけると、目的地について助手席で眠るからそれから良いよと返してきた。どうやら、最後まできちんと自分で運転していくみたいだ。彼は根がまじめなので途中で捨てたりはしないだろう。

車の窓を開けて外の空気を吸うと海岸の町とは違い、ここは空気が悪い。

あの町の空気は澄んでいてきれいなものだったが、この街の空気は汚く不純物の多い空気だ。

都市、それは人が寂しさを紛らわすために作った偽装された場所。が人はそれですべてを隠せず、偽りの自分をその場所で作り出している。

私自身もそういう場所に身をおいて隠れるようにしていたときもあった。それが都市の怖さ。都市は自分の存在を隠す。

そしていつのまにか自分のことを忘れる。

第3東京市はもう少しで首都になる。行政の多くは第3新東京市に移り、さらに経済の中心地として名が知られている。

現在、世界で数多く起こっている新たな勢力分立による戦争によって景気は良好。人通りも多い。

かつての使徒戦において傷つく事がなかった街は、今でも平和なものだ。行き交う人々は皆不安のない表情で歩いている。そんな人々を見ていると気分が悪くなりそうだった

自分達には関係ないからそんな表情をしていられるのだ

もうすこしで、目的地の大きなショッピングセンターに着くようだ。私は車の後部に積んでいるカバンを出し降りる用意をはじめ。頼まれた商品をすべて買うのにおそらく2時間ほど掛かるだろう。気が思いやられるがやらないわけにもいかないので、できるだけさつさと終わらせるに限る。

ただ、後ろからこの街に入ってからずっとついてきている後ろの車に載っている人物がちょっとかいをかけなければだが

鬱陶しいくらいずっと尾行してきている車の乗務員の一人は見覚えがある。

できれば、接触したくもないがそうもいかないだろう

「帰りは少し荒れるかな」

私は横で運転している彼に聞こえないようにそう呟いた

第11話 身を守るため

「着いたよ。僕はここで助手席に座って寝てるから買い物終わった
ら運転して帰ってね」

彼はそう言うつと運転席から助手席に座る場所を変えた。私はすでに
外に下りているので問題ない。

わかったわと私はそう言うつて行こうとした時、彼が突然紙袋を放り
投げた。

突然の事に一瞬驚いたが、私に渡すように放り投げられた袋をキャ
ッチできた。

袋は少し重い物だったけど、なに？と彼に聞くと頼まれたものだよ
と返してきた。

「ああ、あれね。ちゃんと準備してくれたんだ」

「まあね、なにせ可愛い女性のお願ひには弱いから」

彼は全部補充してあるから気をつけてねとそう言うつとイスを倒して
寝始めた。

私は受け取ったものをカバンに入れてショッピングセンター内に入
っていた。

後ろからついてくる誰かの気配を感じながら

.....

「にしてもあんなものをほしがるなんて、怖いね」

車の中から彼女を見送ると彼はそういった
あれは昔の知り合いから買い付けたが、彼女があの話を持ってきた
ときは驚いた。

1ヶ月前、夜遅くに彼女は自分の家を訪れた。

私は何の用事なのか見当もつかなかったが、玄関で話をするのもな
んだらうと思いい彼女を自宅に招き入れた
家の中はそれほど片付いては居ないが別に人が入れないほどの汚さ
というわけでもないので大丈夫だ

彼女と私がイスに座るととんでもない一言が飛び出した

「拳銃を売ってくれませんか」

その一言に私は驚いた。私は昔話を彼女の一度聞かせたことがある
がそれはもう何ヶ月も前の話だ

それに最後に冗談だよと付け加えたので、信じてはいないだろうと
思ったがどうやら本当に信じてしまったようだ

「どうして欲しいんだい」

「身を守るため」

彼女は淡々と質問に答えるだけだった。いつもの彼女の姿はなくま
るで冷たい人形がいるように私は感じた
正直言えば気味が悪かった。いつもの彼女はこんなことをしないこ
とを知っているからなおの事だ

「誰から身を守るんだい」

私はその次の言葉を今でも鮮明に覚えている。彼女の言った言葉に私はある種の恐怖を覚えた

「私を害するものから守るためにいるの」

「だから、売って」

彼女は無表情でそう言い、ポケットから数万円が出てきた。

私はそれを受け取ってしまった。なぜ彼女があんなものをほしがるかに少し疑問を持ちながらも

拳銃に関しては昔の旧友に安く仕入れてもらった。用意したのは警察や軍でよく使用されているベレッタM92

装弾数は15発だ。女性には少々厳しいかと思ったが本人にいくつかの私がかもっている銃の試射をしてもらったところ

特に問題がなかったのでこれを選んだ。弾数が多いのも選択理由である。

彼女があれをどうするつもりなのか私にはわからないがあれである子が安心して暮らせるなら安い買い物だと思った。

セカンドインパクト以降、銃は良く流れてくる商品だ。治安の悪化と共に国内でも流通し始めた。

政府も事実上黙認状態。今はそうでもないが抜け道はまだ多い。私が銃を彼女に格安で売ったのもそれは私が彼女の魅力に引き込まれたのかもしれない

それがどういふ結果になろうと私は彼女の幸せを願っている。

彼女が何をしようとも

第12話 希望、それがみつかったの？

後ろのバカは、下手ね

買い物にずっとついてくる尾行が下手な男の子。こっちは銃をポケットに入れて持ち歩いているし、身の安全は問題ない物の影に入って適当に撒くのもいいが、それで疑われるものもいやだ。

「無視しておこうかな」

別に危害が加えられる事はないが、何かあればすぐに私が誰かがすぐにはれるであろう。

彼は私にとってもっとも警戒するべき人間の一人である事に変わりはない。

使徒の力は失われたはずだ。あの旅館で再会したときもダブリスの魂は感じられなかった。

ただ、ダブリスは心に敏感であった。能力の一片が残っている可能性もあった。

.....

「ええ、彼女の尾行は彼がやってるわ」

「一応保安部員をつけてるから問題はないけれど彼女の経歴については間違いないのね」

カオリ達が乗ってきた車の遠くも近くもなく離れた場所に別の車が止まっており、車の中では女性が電話をしていた

「でも、おかしいわよ。今まで戻ってきた人物を調査してきたのに漏れがあったなんて」

『何万人と検査しているのよ』

漏れがあつて当然よと電話の向こうの女性は返してきた。

ネルフは帰還者の中に使徒の力を保有しているものがないかを検査してきた。

それは再び使徒が現れてはならないからという名目だが

実際は自ら、ネルフの力を壊されないためと今後の抑止力のための実験材料がほしかったからといったところだ

尤も、実験材料といつても別に体を分解するわけでもなくしばらく使徒の力を観察させてもらうだけだ

『渚君の話ではシンジ君の話も白を切った。本当に知らない可能性もあるんでしょ』

「ええ、少し気になるから調べてほしいって言われて調べたけどまったくの白」

過去の経歴など調べようがなかった。カオリの記録はサードインパクト以降に作成されたものだけ

人の記憶もそれ以降ものだけなのだ。セカンドインパクトの帰還者ということだけにそれ以前の資料はまったくないに等しい過去をなくしてしまった人間。それが彼女なのだ。

仮に使徒の力に目覚めていたとしても今のところ害はないのだから、しばらく監察が付く程度で本人に不自由は掛からない

『まあ、何か変わった事があつたら連絡しなさい』

「了解」

彼女が電話を切ると椅子を倒して横になると冷房の聞いた車内で呟いた

「あなたは何を望んでこの世界を創造したの？」

「どうしてあなたにとってつらい世界だったのに元に戻したの？」

「希望、それがみつかったの？」

「ねえ、シンジ君」

その答えが分かるときは来るのだろうか。

その直後、彼についていた保安部員から連絡があった。

警護していた人物の突然の失踪と彼が尾行していた女性が消えたという連絡が

「ずいぶんと気持ちの悪い事をしてくれたわね」

カオリが女性には似つかわしくない金属製のものを手に持ち、同じ髪の色を持った少年にそれを向けていた

「それは、申し訳なかったね」

少年は謝るものの何か確信めいたものを持っていた。

それはようやくたどり着けた真実に確かな確証がもてたのだ

「碓シンジ君」

もはや呼ばれることはなかった名前。

その名前には忌むべき名前。もはや消えた名前

第13話 知っているの？

「私があなたの言う碇シンジだって言う証拠は何もないわ」

私はその名前を聞くのもいやだといわんばかりに強い口調で言うが、一度確信を持った彼を動かす事は容易ではないというくらい想像できた

「君がそれを僕に向けている時点でやましい事があるんじゃないかい」

「あなたが変質者のような真似事をしなければ必要はなかったわ」

引き金を引きそうになるとカオルは言った

「神様は大変かい？」

その一言に私はきつと顔色が青くなっていたと思う。

「……………死んで……………」

『バンッ』

カオルは自分の腹部から生ぬるい液体が流れるのを感じた。

それが何かを理解する直前に誰かに首筋を叩かれて気を失った。

私は自分のやってしまったことを理解し叫びそうになるが誰かに口を押さえられて叫べなかった

誰かに見られたということよりもやってしまったことに恐怖を感じて何が何なのか分からなくなった

口を押さえているのが誰なのか見ている余裕もなかったが、耳元で知っている女性の声が聞こえた

「私が何とかするから少し落ち着いてくれないかしら。押さえるのも大変なのよ」

その声を聞き私が振り返ると空色のワンピースではなく、闇に紛れるような黒色のライダースーツを着ていたルミナさんだった

彼女は携帯電話でどこかに連絡を取り、ついてくるように言われた私は迷子の子供のようについていった。そのとき、正常な判断能力はなかった

ショッピングセンターの裏の通路をずっと抜けていくと従業員専用の出口がありその前に黒いバンが止めてあった

運転席にはスーツを着た男性が座っていてすぐに出すから座るように言われた。私が車に乗り込み彼女も乗ると発進した

「これで、あなたの身は安全よ。写真家の男性もショッピングセンターから出発していて別の場所で落ち合うから大丈夫だから」

それとあなたの買い物も代わりにしておいたからといわれた

私が驚いた表情で彼女を見るとトランクと指差していてそこを見ると買い物袋がぎっしりと詰まっていた

「なんで」

知っているの？

第14話 どうしてここに止まったの？

「カオリちゃん！」

写真家の男性と落ち合う場所に着くと彼は待ちきれずに私たちが乗っている車のドアを開けた
よほど心配だったのだろう。彼の顔色は悪かった

「外傷はないわ。ただしばらくは心の整理が大変でしょうけど」

ルミナは冷静に言うが、写真家の男性の表情は明らかに怒っている表情であった

「あなたたちは監視していたんですか」

そうでもなければ自分達の行動が知られるはずがない。つまり元から尾行されていた、ということになる

それは信頼していた相手に裏切られたという事を意味していた。彼とてルミナの存在を知らぬわけはなかった。あの小さな町だ。誰かが入ってくれば噂になる

彼女の事とて噂になり耳にしていた。彼女はあの旅館の関係者を除いてもっともカオリに近きもの。

そんな彼女がカオリを裏切ったと知れば彼女は壊れてしまう。カオリが裏切られる事をひどく嫌うことはよくわかっていた

「私はカオリを守るのが使命なの。それをわかってほしい」

彼にとってそれは苦し紛れの言い訳にしか聞こえなかった。

- - - - -

結局その後、私は彼の運転する車であの町に帰っていった

でも、こころの中では裏切られたというよりも、彼を傷つけてしまったという気持ちのほうが大きかった。

たとえ少しでも彼のことを知っていて使徒であった彼のことも知っているからこそ、そうだったのかもしれない

あの町に着いたのはちょうどきれいな夕日が見れる時間だった

「どうしてここに止まったの？」

もう少しで私の家というところで彼は車を止めた。そこはがけの上にある展望台の前。

彼は車を降りると少し話をしようかと言い、私を誘って展望台のベンチのほうに歩き出した。

展望台からは雄大な海にゆっくりと沈もうとする太陽。

カオリはベンチに座り、その横に男性も座った。二人は黙って風景を眺めていた

が、黙り続けていた私が話し始めた。

「バカな男の子が一人いたの」

「その子は、自分がどんなに非力なのかわかっていて誰にも関わろうとしないの」

「でも、2人の女の子が来て、その男の子の心を溶かしたの」

「でも、結局男の子は二人を見捨てるしかできなかったの」

「自分は非力だっ
てわかって
いたから」

第15話 『水川カオリ』 なんだ

「バカな男の子が一人いたの」

「その子は、自分がどんなに非力なのかわかっていてから誰にも関わろうとしないの」

「でも、2人の女の子が来て、その男の子の心を溶かしたの」

「でも、結局男の子は二人を見捨てるしかできなかったの」

「自分は非力だっってわかっていたから」

それは自分の苦しみ、逃れる事のできない罪なのだ

「バカな男の子は二人を殺してしまった事に後悔でいっぱいだったの」

「苦しんで苦しみつくした彼は再びすべてを元に戻そうとしたの。まるで赤ちゃんが崩れた積み木をつみなおすかのように」

「でも、元には戻らなかったの・・・そうよね。自分が元の形がどんなものなのかわかっていなかったのだから」

「もういいよ。カオリちゃん」

彼はそういうが私は話をやめなかった

「それでも、バカな男の子はもとにもどそうと」

「もういいんだ！カオリ！」

彼は強い口調でそういうと私を抱きしめた。もう泣いている君を見たくない。彼はそう言った

私は泣いていたのだ。『バカな男の子の話』をしながら泣いていたのだ

もういいんだよカオリちゃんとやさしい口調で慰めるかのように言っていた

私は自分が泣いているという事を理解してはいなかった。いや今までの話には一切感情がこもっていなかった。

まるで機械から発せられる言葉のように単調に話していた

「もういいんだよ。かおりちゃん」

「君は君なんだよ。『水川カオリ』なんだ」

そのとき、少しだけ私は彼の言葉の真意を感じた

彼は………私のこと……

だがそれは叶わぬこと。人と神様は違うのだ

.....

「それで、彼の容態は」

真っ白い部屋で一人の少年がベットで寝ていた。腕には点滴がされておりここが病院だという事がわかる

部屋の中には少年以外に2人の女性が立っていた。金髪で白衣を羽織っている女性はネルフで技術部長をしている赤木リツコ。

もう一人は先ほどベットで寝ている彼と共にいた葛城ミサトだった

「幸い、彼らの通報で早期発見されたから命に差し障る事はないわ」

「で、あいつらはなんて言ってきたの」

「ネルフの護衛ってそんなものなのですかという嫌味よ」

「監察局の連中！」

それはネルフという狂犬につけられた飼い主。

だが、それもあの子を守るために存在するのだと彼らが知るのはまだ後の話だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4571s/>

彼女の思いと海岸の町

2011年11月5日19時57分発行